



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	森宣雄『地のなかの革命：沖縄戦後史における存在の解放』
Author(s)	平井, 一臣
Citation	境界研究, 2, 189-194
Issue Date	2011-11-25
DOI	https://doi.org/10.14943/jbr.2.189
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61249
Type	departmental bulletin paper
File Information	09Hirai.pdf



[書評]

森宣雄『^{つち}地のなかの革命：
沖縄戦後史における存在の解放』⁽¹⁾

平井 一 臣

1. 沖縄・奄美現代史研究に新たな光

沖縄と奄美。この二つの地域は、かつては共に琉球王国の版図のなかにあり、また、1945年から1953年までの時期、ともに米軍支配下にあった。しかし、前近代についてはともかく、近現代史のなかで沖縄と奄美が関連付けられて論じられることは、それほど多くはない。沖縄と奄美を舞台とした社会運動、とくに沖縄非合法共産党とその周辺に光をあてた本書は、ボーダー研究のだいご味も提供してくれる優れた研究である。そのだいご味の来たる所以は後に述べるとして、本書の内容の概略をまずは紹介しておくことにしよう。

2. 本書の概要

まず序章では、筆者自身の沖縄戦後史に対する問題関心が披歴されている。沖縄戦後史とは「無主権の歴史」「所属不明の歴史」と考える筆者は、沖縄の日本復帰を「歴史の展開のなかで社会運動の高揚と停滞に大きく揺り動かされながら実現された歴史的な創造の産物」(21頁)と述べる。すなわち、復帰までの沖縄の歩みは可変的流動的であり、むしろ日本とアメリカの狭間に生みだされた「地位の不明確さと未決定性」(26頁)のなかで、「主権あるいは自己決定権の剥奪」をうけた沖縄住民の存在に著者は目を向ける。逆説的ではあるが、こうした沖縄住民が置かれた状況は、沖縄の地を「主権の空白」にしたことをも意味するのであり、国家を単位とする世界史-国史-地方史という歴史認識のヒエラルヒーからは見えないもう一つの歴史の世界が立ちあがるのである。

こうした著者の沖縄認識、さらには沖縄認識を支える歴史認識は、沖縄非合法共産党へと連なる戦後の奄美・沖縄の社会運動の推移についての生き生きとした歴史叙述に活かされていると言えるだろう。それは、これまで未発見であった新資料を駆使しているという史料的な問題というよりも、未発見資料を前にした著者が、その史料の向こう側にある当時を生きた人々の声を読み込もうとしているからに他ならない。そして、これらの社会運

(1) 森宣雄『地のなかの革命：沖縄戦後史における存在の解放』現代企画室、2010年。

動の推進力となった人々の多くは、無名の、あるいはその後の歴史の中で無名化されていた人々であった。

本書の具体的な歴史叙述の始まりは、奄美共産党の叙述から始まる。第一部「分離なき人民再結合としての日本復帰運動」は、第二次世界大戦後に沖縄とともに分離された奄美における社会運動を中心に、当時の復帰論の位相、奄美現地、共産党中央、そして沖縄での復帰問題をめぐる錯綜した議論の跡を追いかけている。

第1章では、奄美の復帰運動とそこでの奄美共産党の動向が分析の俎上に乗せられている。従来の奄美の復帰運動史は、復帰協議会に結集した勢力によって最終的には民族主義的な運動として本土への復帰を果たした物語へと収斂していった。そのなかで果たした奄美共産党の役割についても、復帰運動の初期の段階から、とりわけ民衆運動を広げるにあたって大きな役割を果たしたこと、復帰運動のヘゲモニーが保守派へと移っていくなかで、奄美共産党が切り捨てられていった点に言及はされるものの、基本的には復帰運動の結実にいかに貢献したのかという点が強調されてきた。しかし、著者によれば、奄美共産党は本来本土への一体化志向を有していたものの、運動のプロセスで一時的に「独自の共産党」(115頁)へと転化した。ただし、その理論的な背景には徳田球一の革命構想の影響があり、その意味では、中央志向の産物であったとも指摘している。中央への依存体質を持ちながらも、奄美社会の現実と直面し「独自の党」化しようとする奄美共産党の実像は、しかし復帰後に書かれた党史では、奄美共産党が持っていた複雑な性格は捨象されてしまっている、というのが著者の指摘である。そして復帰後の奄美共産党に関する歴史像のなかですっぱりと抜け落ちてしまったもの、それを象徴的に示す人物が第3章で取り上げられる林義巳である。その林が深くかわることになる沖縄における革新政党・人民党の戦後の錯綜した軌跡が第2章で明らかにされている。

戦後沖縄の革新勢力の象徴的存在である人民党の歴史もまた、奄美共産党の歴史がそうであったように、後代の歴史像と同時代的な実像との間の乖離がある。筆者は、人民党立ち上げの時期に遡って、この党が結成当初からもっていた複雑な性格を指摘している。たとえば、結成当初の「人民党は民政府与党と目されていた」(180頁)といった指摘がそれであり、瀬長亀次郎の『うるま新報』社長就任もその文脈のなかにあった。しかし、人民党の結党時の綱領や運動の中味から、「ただ無批判に政府に与するのではない、左派の大衆政党としての立場」(183頁)も包含したものでもあった。このように筆者は、米軍占領下という制約下での瀬長や人民党の立ち位置を丹念に説明している。

こうして発足した人民党であったが、発足後しばらくの停滞期を経た後、49年に入り活動を活発化させ影響力を拡大していった。それは、直接的には米軍政府の拙劣な経済施策による沖縄の経済的困窮を背景とした生活防衛の要求の組織化であったが、マクロには冷戦の本格的な開始と連動していた。そうした流れのなか、それまで軍政府との対決をでき

るだけ回避していた人民党は、軍政府との対決へと舵をきることになる。当然のことながら米軍による弾圧もひきおこすこととなる。そうしたなかで、「対米抵抗の旗手としての人民党の個性」(200頁)が確立されていくことになる。そのなかで、最も重要な役割を担ったのが49年4月に東京から沖縄に戻った上地栄だったという。

上地は、当時のリーダー瀬長亀次郎と時には対立しながらも、人民党における急進派の台頭に大きく寄与した。とくに50年9月の沖縄群島知事選挙をめぐって、独自候補擁立を見送ろうとしていた瀬長らに対して、上地ら若手幹部による独自候補擁立の主張が通り瀬長立候補に至ったのは、上地ら「急進派」の台頭を示すものだった。そして、この知事選の最中の演説会で「戦後沖縄ではじめて公の場で日本復帰をかかげた発言」(212頁)がなされる。それが三候補合同演説会での上地の演説会であった。

上地ら急進派の運動はその後の沖縄における日本帰属論の台頭に結びついた。そしてそれはまた、社会大衆党を左へ左へと引き寄せる力学を生み出してもいた。しかし、急進派が次第に影響力を強めていく最中、上地らは除名される。この上地除名を伴う急進派排除には瀬長も一定の役割を果たしたと言う(229頁)。

しかし、上地ら急進派が捲いた種は、そこで潰えたわけではなかった。上地ら急進派は排除されたものの、彼らが沖縄の現場に根差したかたちで人民党の運動を構築した流れは、奄美共産党の林義巳の登場で新たな刺激を与えられる。すなわち、本書で初めて明らかにされた奄美共産党から沖縄に渡った林の行動は、沖縄非合法共産党結成への大きな一歩と連動する軌跡として描かれているのである。

奄美共産党から沖縄に派遣された林は、沖縄に大量に流れていた奄美出身者(その数は3万とも5万とも7万とも言われる)の問題を視野に入れながら、具体的には沖縄の港湾労働者を組織化し、そして沖縄初のストライキを決行させるまでに至る。林の試みは、沖縄と奄美の間で入れ子構造になった差別の構造を、沖縄における底辺労働者層を形成していた奄美出身労働者の力を梃子にした連帯の組織化へと結びつけることにあった。この林の試みとその意義が、説得的に叙述されている。

こうした林の試みは、「主権の空白」状況のなかで、人民のなかへ、そして人民とともに立ちあがるにはどうしたらよいのか、その模索の試みであり、それは人民党内部で、急進派の流れをつくり出した上地の活動とも通底する。そして上地や林らの活動は、沖縄非合法共産党の誕生へと連なっていく。具体的には、1952年6月26日未明、瀬長・林会談により沖縄非合法共産党の創設が決定されたという(276頁)。

この非合法共産党結成を前後して展開された社会運動を、筆者は奄美と沖縄を越境する社会運動ととらえ、それはまた1950年に勃発した朝鮮戦争を視野に収めた「朝鮮への爆撃基地オキナワを包囲する、越境の労働戦線」(283頁)だったとも言う。

本書の第二部は、第一部で捲かれた種が、どのような形でその後の非合法共産党の運動

へと連なっていたのか、そしてまた、非合法共産党とは一体何だったのかという問題を、そこで重要な役割を果たした国場幸太郎(沖縄の建設会社国場組の創設者国場幸太郎と同姓同名)の動向に光をあてながら明らかにすることが試みられている。

国場は、「戦後第二世代」の沖縄出身共産党員であり、優れたリーダーシップと組織力を備えた人物であった。「島ぐるみ闘争」が爆発的に広がっていったのは、国場らの地下活動によって、まさに沖縄の地の下に地下茎のように広がった人々の連帯であった。「島ぐるみ闘争」に向かう国場らの活動を描いた部分は実に生き生きとしているとともに、地下活動であったがゆえに、そこには記録にも残されない(残せない)様々な行為の網の目があったことが示唆されている。

本書が指摘する非合法共産党の特徴は、54年の弾圧により人民党が壊滅状態に陥った後に、危機に陥った大衆運動を「急進化と統一戦線の拡大という一見あい矛盾する二つの方向で発展させ」る「急進主義的統一戦線」にあった(325頁)という。国場は、日本共産党沖縄対策方針を持ち帰り、その中の統一戦線論と「反米・祖国復帰・土地防衛の統一戦線」のスローガンは、「大枠の設定として、沖縄の実情と自分たちの政治路線に適したものであるとして、委員の全員一致で積極的に活用することを決めた」(336頁)という。この指摘からもわかるように、非合法共産党を担った側は、日本共産党の方針に従ってというよりもむしろ、自らの運動の現場に即した形で運動を組み立てようとしていた。そして、こうした立脚点に立つ非合法共産党による大衆運動路線は、社会大衆党をまきこむ形での土地闘争の取組みとして展開されていくことになる。土地闘争の展開は米軍の強硬姿勢を呼び起こし、それがさらに土地闘争を激化させ、ついに56年の「島ぐるみ闘争」へとつながっていった。しかし、筆者は、従来の研究が「島ぐるみ闘争」以前の沖縄を暗黒の時代にとらえ、「島ぐるみ闘争」で一気に沖縄の社会運動が開花したというイメージに支配されているという。筆者が強調するのは、「島ぐるみ闘争」に至る非合法共産党による「急進主義的統一戦線」の様々な取組みであり、さらにこうした非合法共産党に連なる、土地や林に象徴される運動家によってまかれた種の存在である。

3. ボーダー研究としてののどご味

以上、簡単に本書の内容を追ってきたが、冒頭に述べた本書が有するボーダー研究としてののどご味の所以を指摘することにしよう。

まず第一に、本書が取り上げているボーダーが、単に国と国との境界線という一本の線ではなく、沖縄、奄美という言葉ばグレーゾーンとしてのボーダーに着目している点にある。国境というものが近代以降の国民国家形成とともに引かれた人為的なラインであるとするならば、実際のボーダーは様々なグラデュエーションを伴う曖昧模糊としたものであろう。そして、そうしたボーダーの特徴に着目するならば、ボーダーの世界の多層性や多

様に当然目が向けられねばならない。同時にまた、本書から読みとれるもう一つのボーダーの意味があるように思われる。それは、戦後共産党における組織と組織の間のボーダーという意味である。本書を通じて、共産主義運動におけるインターナショナリズム、ナショナリズム、そして土着からの思想の絡まりあいのなかで、共産党中央と地方党組織の間の、そしてさらには組織内部における様々なボーダーの存在が示唆されているのではないのだろうか。

第二は、そうしたボーダーの複雑な絡まり合いを、戦後の奄美、沖縄の世界を舞台とした具体的な活動の展開を未発表の史料も積極的に活用しながら明らかにした点にある。とくに奄美や沖縄をそれだけで完結した閉じた世界としてではなく、様々な外部との接触を通して変容する世界として描いている点が重要である。そこではとりわけ上池や林といった越境者が果たした役割がクローズアップされる。その結果、ボーダーのもつ多層性は静態的ではなく極めて動態的に捉えられている。

第三に、本書が描き出す民衆レベルまで根を下ろした社会運動の試みは、こうした錯綜したボーダーのなかにあって、国境というボーダー、組織というボーダーを突き抜けていく思想の可能性とでもいうものを示唆している。本書のタイトルにある「^{つち}地のなかの」という言葉は、その意味で非常に象徴的である。我々は、国境や組織の問題を考える場合、国家対国家、組織対組織という思考の枠組みにとらわれがちである。しかし、こうした図式的な対立図式を乗り越える方法の一つは、「^{つち}地のなか」に埋もれた現場に根差した社会運動がもった可能性のなかにあるように思われる。

以上のように、本書はボーダー研究に多くの刺激と示唆を与えている。また、これまで明らかにされていなかった、奄美と沖縄の社会運動レベルでの関係や、非合法共産党問題についても、未発表資料も駆使しながら明らかにしている。

4. 残された課題

ただ、筆者が強調する50年代に繰り上げられた統一戦線の試みがある程度進展したのは、50年代の沖縄、奄美がよって立っていた時代的な条件にどこまで規定されていたものだったのかという疑問も残る。本書冒頭で2010年の徳之島での米軍基地反対運動が取り上げられているが、50年代に展開した「^{つち}地のなかの革命」を支え、生み出した土壌は、その後の歴史的变化のなかでも残っていると考えてよいものだろうか。また、急進派との関係で微妙な立ち位置にあった瀬長の状況認識について、より踏み込んだ分析があれば、当時の統一戦線を押し上げた論理をより立体的に描き出せたのではないかと考えられる。これらの問題については、おそらく著者の今後の研究のなかで明らかにされることなのかもしれない。

また、本書の関心が政治史あるいは社会運動史のみならず、思想史ないしは政治哲学的

な領域にまで及んでいるために、本書が提起する問題を理解するにはかなりの咀嚼力が求められるように思われる。もちろん、それは本書の価値をいささかも貶めるものではない。むしろ、実証主義的な歴史学が見失いがちな、大胆な構想力の下で歴史を描くだご味を示す作品だと言えるだろう。